

私は今彼の家にいる。週に一回泊まっている彼の家。彼は家のことをあまりやらないから泊まりに来た時に私
がやっている。食べ残したごみも、溜まった食器も山積みになった洗濯も私が全部やる。彼は仕事が忙しく、私
にはあまり構ってくれない。けれど、こうして週に一度彼の家に來ることが幸せだった。近くにいらればなん
だってよかった。

俺はまなみという女性と付き合っていた。彼女は忙しい俺の部屋に來て汚い部屋を掃除してくれたり、家事をこ
なしてくれた。心が優しくとてもいい子だった。俺はずっと彼女と一緒にいると思っていた。あの出来事が起こ
るまでは。

彼は私がないと生きていけない。そんな気持ちがあるから私はまだここにいられる。彼は今日も無言で帰宅し
て適当なご飯を食べてお酒を飲んで眠りにつこうとする。体によくはないよ、と言っても彼は何も言わない。それ
でもいい、彼の愛は私が一番よく知っているんだから。

俺はあの日のことを忘れようとしたことは一度もなかったはずだ。けれど、忘れたがっている自分がいること
に気付いてしまった。薄情な人間だと呆れるが、傷をそのまま残しておくには少し辛かった。まなみは気付いて
いるのだろうか。

私は彼と付き合って二年の記念日に一緒に暮らそうという約束をした。私は一人暮らしをしていた期間が長か
ったから本当に嬉しかった。一緒に暮らせる日を待ちわびていたのに、何があつてかその話は延期になってしま
い現在のように週一で彼の家に泊まるスタイルになってしまった。

どうして週一しか会えないのかつて？彼、ひどいの。私のことが好きって言ったのに、一緒に暮らす約束も
したのに、好きな人が出来ちゃったみたいで。その女の人が彼の家にずっと泊まっているの。その人一週間に一
日だけ夜勤の日があつて、その日だけ会いに行つてるの。でもね、私がないと生きて行けないって、彼はそう
言つたから、大丈夫。彼の愛は私が一番知つてるんだから。

俺はまなみが好きだった。本当に気の利くいい子で、彼女無しでは生きて行けないときえ思っていた。けれど、
いなくなつてしまった今もこうして生きている。残酷な話だ。今はそんな過去を上書きするかのように他の女性と
付き合っている。こんな姿を見たまなみはどう思うだろうか。最悪だよな。けれど、現実を生きている俺にはそ
うするしかできなくて。あまりにも突然のことだからまなみはまだ受け止めきれずに彷徨っているかもしれ
ない。俺がしっかりとしなきゃ。

彼は週に一度、私が写っている写真に手を合わせる。やっぱり私のことが大好きなんだよね。私がないと生
きて行けないんだよね。その気持ちだけなの、私にここにいられるのは。また来るね。